

# 「音」や「五感」を通じて水の大切さを訴える 「水の音原風景」プロジェクト

ウォーターネットワーク 代表 柴崎 勉

## 自然を映す日本の音

川のせせらぎ、波の音、雨音。水の音に感じるやすらぎ、この心地良さは何なのだろうか？

そんな単純な疑問と一人の尺八演奏家との出会いから「水の音原風景」プロジェクトは始まった。

たまたま行ったある野外演奏会で聴いた田辺洌山氏の尺八の音色は、野外の自然と一体となった不思議な世界を生み出し、それまで和楽器に特に興味を持っていなかった自分にとって衝撃的な夜となった。風に揺れる木々、鳥のざわめき、星や月。和楽器の音色が自然とともに、美しく心に響いた。

この演奏会をきっかけに和楽器や伝統音楽の世界に興味を持ち、何か水の問題にアプローチできないかと考えるようになった。ウォーターネットワークは、名前の通り「水のつながり」をテーマに、環境、文化、生活、産業、健康・福祉などの分野を超えて独自の視点から研究・活動を行っており、現代社会で見えにくくなっている「水のつながり」を再認識いただき、その大切さを理解いただくための啓発活動なども行っている。この活動の一つとして、「水の音」と「日本の音」をテーマに何かできるのではないかと感じた。

豊かな水に恵まれた日本には、「水の音」や「水」を楽しむ文化が受け継がれている。地中に埋めた甕に響く水滴の音を楽しむ水琴窟や、水の流れを利用した鹿威し。日本の庭園には、水の音やその姿が欠かせない。実際の水がなくても、枯山水の庭では石や砂で滝や川、大海までも表現してしまう。

日本の伝統文化や伝統音楽も日本の豊かな水によって育まれてきたと言える。豊かな雨が森を育み、日本の「木の文化」を生み出した。日本の伝統楽器も木の素材が使われている。尺八は真竹、箏は桐、鼓は桜の木。竹林を吹き抜ける風の音を良しとする尺八のように、自然の素材から生まれた日本の伝統楽器は、その音色も自然の姿を映し出し

ている。

「水の音」を自然の象徴として、その姿を「日本の音」で奏でる。失われつつある原風景を心に呼び覚ましていただき、水や自然の大切さ、そして、文化とのつながりを感じてほしいと思った。こうして「水の音原風景」プロジェクトがスタートした。

## 水のつながりを迎る

尺八の田辺氏と作曲家・横谷基氏と「水の音」をテーマとしたオリジナル楽曲の制作を行い、1996年、長瀬清流コンサートを計画した。自分の生まれ育った荒川上流の景勝地・長瀬がその最初の会場だ。実施の一週間前に大きな台風の影響で川が増水し、会場予定地が水に洗われ姿を変えてしまうというハプニングがあったが、地元の長瀬カヌースクールや商工会青年部の方々の協力を得て無事当日を迎えることができた。仲秋の名月となった当日、長瀬の岩畳と荒川を背景にした舞台が月の光とかがり火に浮かび上がった。川のせせらぎ、虫の音とともに、尺八と箏、鼓によるオリジナル楽曲が得も言われぬ時空間を生み出した。

その翌年、荒川の流れを迎る野外コンサートシリーズへとつながる。車社会になる前は、元々、川や海が交通や輸送の大切な道であり、その水のつながりを通じて文化も伝わっていた。現代社会では、水や川のつながりが見えなくなっている。自分が毎日の生活で使っている水道の水がどこから来て、使った水がどこへ行くのかも知らない。このコンサートを川の上流から下流まで、流域の方々と連携しながら音楽でつないでゆくことで、その水のつながりに気づき、改めて実感してほしいと思った。流域の自治体や環境活動に携わる多くの方々の協力を得て1997年に東京ウォーターフロントコンサート、1998年には荒川源流コンサートが実現した。ウォーターフロントコンサートは

## 「音」や「五感」を通じて水の大切さを訴える「水の音原風景」プロジェクト

ウォーターネットワーク 代表 柴崎 勉

元々の荒川の最下流であった隅田川河口で雨音を聴きながらの屋内開催となり、荒川源流コンサートは奥秩父・三峯神社の境内で源流の森に深い霧が立ち込める幻想的な舞台となった。水に縁のある野外コンサートを実施することは大変なことだが、私たちが自然の力には到底かなわないことも教えてくれる。身を持って自然を体感するプロジェクトだ。

97年の東京ウォーターフロントコンサートでは、世界的なデザイナーのコシノジュンコさんにオリジナル衣装をデザインしていただいた。98年春夏パリコレクションの衣装とともに阿波徳島の藍染めを使った「水の衣装」は、美しい水の流れをイ



荒川のせせらぎを聞きながら（96長瀬清流コンサート・リハーサル風景）



霧に包まれた源流の森が舞台（98荒川源流コンサート）

メージさせるもので、このプロジェクトの演出に欠かせないものとなっている。

## 子供たちと、そして、五感で聴く

このプロジェクトは、単にコンサートで音楽を聴いてもらうだけではなく、様々な面から水のことを知り・体験できる要素を複合させてきた。それは、水と私たちが生命・生活・文化のあらゆる面で深いつながりを持っているということをも面的に実感してもらうためだ。

## (1) 子供たちの環境体験プログラム

その一つは、東京都環境学習リーダーの方々との協力をいただきながら実施してきた子供たち向けの環境学習プログラムとの複合や、子供たちに和楽器の体験をしてもらいながら日本の自然を感じてもらう「自然の音遊び」の実施などだ。水の多面的な姿を知ることができるとともに、普段の生活の中ではなかなか接することのない和楽器や和楽器演奏家との交流は、子供たちにとって忘れがたい体験となっている。

## (2) 子供たちと一緒に音楽を創る

子供たちと一緒に音楽を創るという試みも行っている。「Water Colors」という子供たちの合唱と和楽器が共演する曲を作曲いただき、コラボレーションを行なった。岡山や埼玉で実施したが、子供たちの声が様々な水の流れる姿を表現し、地域の水や川の大切さをアピールするものとなっている。

## (3) 五感で聴く

自然の中で聴く水の音楽舞台は、その日、その時間の天候と自然とともに、二度と再現できない“一期一会”のものだ。

今の時代、水の大切さを理解していない人はいな

いと思うが、どれだけ実感を伴って日常生活で水を大切にしているだろうか。日本では想像つかないことだが、世界では汚れた水が原因で年間約400万人の子供の命が失われている。これが我々の生きる“水の惑星”の現実である。今、私たちに必要なことは、水の大切さを頭で理解するのではなく、心の奥底で実感することだと思う。そのために、「水の音原風景」プロジェクトは“五感で聴く”ということの一つのキーワードとしてきた。野外演奏会では、普段眠っている五感が呼び覚まされる。何気なく見過ごしていた音や香り、自然の息吹に気づく。頭で考えることの多い現代社会で、五感の価値を見直してもらいたいということで、



和楽器や音を通じて自然を知る「自然の音遊び」(2000年、江東区枝川小学校)



水を知る環境体験プログラム(東京ウォーターフロントコンサート2000、江東区豊洲埠頭)

観て聴くだけでなく、「香り」、「触れる」、「味わう」といった要素も体験できる実験的なものも実施してきた。2000年7月には、東京青山の草月会館にある石の彫刻の巨大空間・イサムノグチ彫刻庭園「天国」を会場に実施した。「五感で聴く・森の音、水の響き」と題したこの試みでは、石の彫刻の間を流れる水のせせらぎの音、シーンによって変わる香り、美しい水によって育まれたお酒を味わいながら、水や自然環境に思いを馳せていただくコンサートとなり話題となった。



五感で聴く「森の音、水の響き」(2000年、イサムノグチ彫刻庭園「天国」)

### 水のつながりは国境を越える

水のつながりは、国内各地へと広がった。98年、奈良「音と光の回廊」では、奈良公園の中にある鷺池・浮見堂において「奈良の都」と水のつながりを描き、2000年“岡山後楽園築庭300年祭”では旭川の水を引き込んだ「水の庭園」としてその音風景を描いた。2001年、山形県の寒河江川や岡山県的那岐山と名義川、2002年には明治神宮の森と水、「水の都」松江・斐伊川と宍道湖などをテ-

「音」や「五感」を通じて水の大切さを訴える「水の音原風景」プロジェクト

ウォーターネットワーク 代表 柴崎 勉

マに実施した。

更に、海外の地域や国境を越える水のつながりということもテーマとしてきた。人類が造った世界最大の水の道であるパナマ運河、スウェーデンの美しい森と湖、世界一長い川で悠久の時の流れを見つけてきたナイル川など。邦楽界で活躍中の演奏家と新進気鋭の作曲家の協力を得て、水をテーマにしたオリジナル楽曲は20数曲、プロジェクトの実施回数も30回近くにのぼる。

2001年には初の海外ツアーとして国際交流基金の助成をいただき南米ツアーを実施。世界3大瀑布であるイグアスの滝でのデモンストレーションをスタートに、パラナ川、ラ・プラタ川と国境を越えた水のつながりを辿った。ブラジル、パラグアイ、ウルグアイ、アルゼンチンの4ヶ国7ヶ所での連続公演は各地で絶賛された。アルゼンチンの首都ブエノスアイレスでは、日系人学校を訪問。和楽器体験や演奏会で子供達は目を輝かせていた。日本の楽器と音楽を通じて、水の大切さを感じてくれたのではないかと思う。

そして、2003年3月、京都・滋賀・大阪で開催された第3回世界水フォーラムでは、ユネスコからの依頼で「水と文化の多様性」分科会のオープニングでプレゼンテーションと演奏を行った。「水と



南米・イグアスの滝でのデモンストレーション（尺八・田辺冽山氏、2001年9月、ブラジル）

音楽」というアプローチがユニークで意義のある活動であるという声を海外の多くの方々からもいただいた。第3回世界水フォーラムでは、「水の声」パートナー機関としてこのプロジェクトを通じた「水の声」の募集も行い、プロジェクト参加者から多くの「水の声」が寄せられた。その実績が評価されウォーターネットワークは国内の優秀パートナー機関の第3位に選ばれた。このプロジェクトのアプローチ方法が、広く多くの方々にメッセージを届けることができるということを改めて感じた。

#### 次世代へ伝えるもの

21世紀は「水危機の世紀」と言われている。水資源の枯渇や局地的な洪水、水質汚染や地球温暖化にともなう海水面の上昇など、水を取り巻く環境は厳しさを増す一方である。このプロジェクトは、「音」、「音楽」、そして、「文化」という視点から水問題にアプローチすることによって、水の環境問題に関心のない人々など幅広い人々へ訴えることが可能となる。そして、感動を伴った実体験は生涯その人の記憶に残るもので、水の本質やその大切さを心の奥底で実感してもらうことができ、日々の生活の中で水を大切にしている心がけが継続的に生まれるのではないだろうか。

「美しい水」を次世代へ伝えてゆくことは、「水の惑星」に住む我々一人一人の最低限の責任であり、この「水の音原風景」プロジェクトの活動が少しでもそのことに寄与できればと思う。

私たちは、母親のお腹の中、羊水の中で「水の音」を聴いていた。

「水の音」は命の響きであり、失われゆく水と音を次世代へ伝えてゆきたい。

そんな思いでこのプロジェクトを続けていくつもりだ。